輸血情報

【赤十字血液センターに報告された輸血副作用について】
― 非溶血性副作用 ―

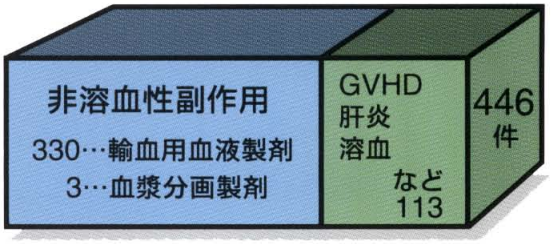
1994年の1年間に赤十字血液センター（以下、血液センター）に報告された輸血副作用の報告件数を集計し、このなかで最も発現の多い非溶血性副作用について分析しました。

輸血副作用の種類は多様ですが、その中でも最も多く発生するのが溶血を伴わない即時型の反応です。軽微な発熱反応、蕁麻疹から全身紅潮、呼吸困難、血管浮腫等の全身的で重篤な反応まで様々です。しかし、免疫学的機序が原因として考えられている一部の反応（下表）を除いて、多くの場合は原因が解明されていません。患者リスクを軽減させるためにも、原因究明が必要となります。

症状の種類	主な原因
発熱反応	供血者白血球抗原に対する患者抗体
アナフィラキシー反応	供血者血漿タンパク（IgA,補体C4等）に対する患者抗体
蕁麻疹	同　上
急性肺障害	患者白血球抗原に対する供血者抗体
輸血後紫斑病	供血者血小板特異抗原に対する患者抗体

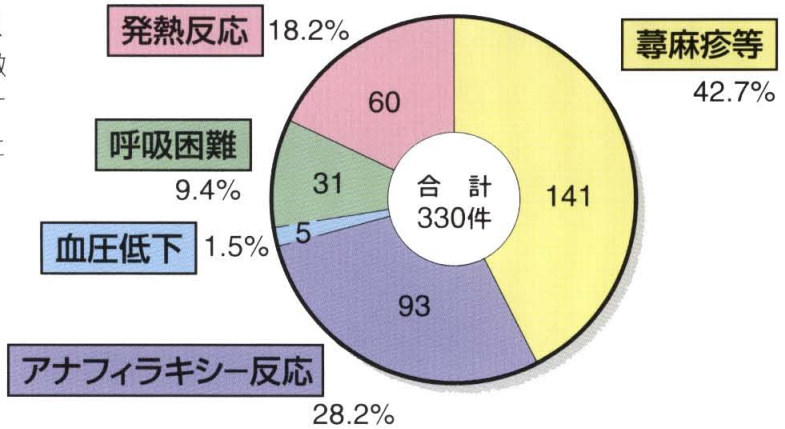
輸血副作用（疑い）報告件数

1994年の1年間に血液センターに報告された件数で、輸血との因果関係が不明なものも含まれています。非溶血性副作用は全体の約4分の3を占めています。



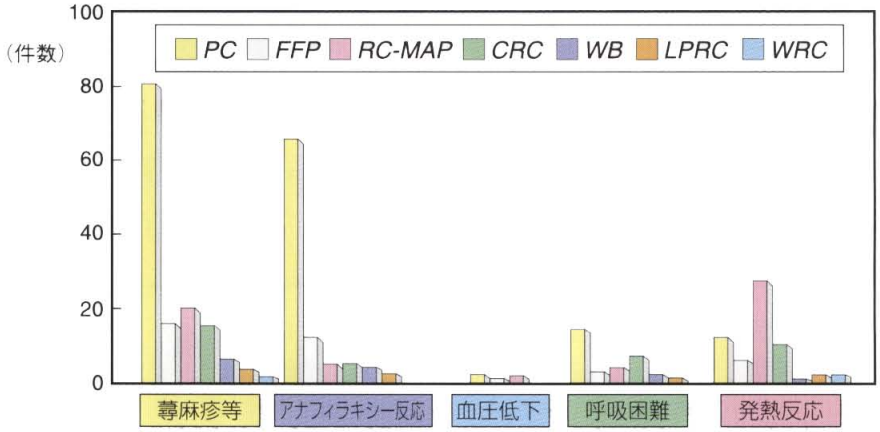
症状の種類

重篤なアナフィラキシー反応が多く報告されています。蕁麻疹等の軽微なものについては、報告されないケースが多く、実際にはもっと多いと考えられます。



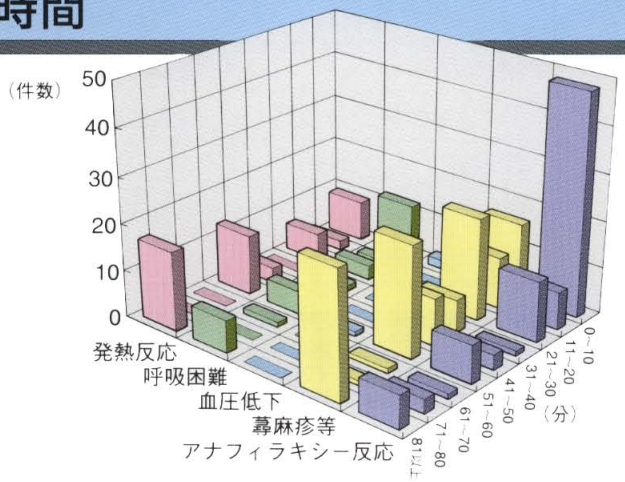
原因血液製剤

蕁麻疹等やアナフィラキシー反応は血小板製剤（PC）輸血時に多く、発熱反応では赤血球製剤輸血時に多く報告されています。



症状別発現時間

重篤なものほど発現時間が早く、特にアナフィラキシー反応は、輸血開始から10分までに多く発現しています。



輸血副作用早期発見のために

輸血による急性反応の有無について少なくとも輸血開始後の5分間程度患者の観察を行い、開始後15分程度経過した時点において再度様子を観察し、その後も適宜観察してください（輸血療法の適正化に関するガイドラインより）

異常がみられたら直ちに輸血を中止し、適切な処置をとること

原因究明のため、血液センターでは検査を行っています。そのためには、輸血に用いた血液バッグやセグメント等、患者血液(輸血前・後)の提出をお願いしています。

副作用が発生した場合には、直ちに血液センター医薬情報担当者（MR）までご連絡ください。

日本赤十字社中央血液センター 医薬情報部
〒150 東京都渋谷区広尾4-1-31
TEL:03-5485-6607 FAX:03-5485-7620
■お問い合わせ